

演奏会裏話 - ピアニストの本音 -

私はドイツに住んでいるピアニスト。日本にいたころは眼科医だったが、ドイツに来てから音楽家に転職したという変り種である。勉強期間も含めればすでに20年あまり、ここで音楽活動をしている。その間、随分色んなところで演奏した。ただし、「コンサート」「リサイタル」「演奏会」といった種々の美しい言葉から連想されるような、音響効果満点のホールと、そこにいっぱい詰まっているマナーのいい聴衆、という理想的な形の演奏会ばかりではない。会場は体育館だったり、教会だったり、普通の民家だったりまちまちで、また客席はガラガラだったり聴衆のマナーが悪かったりと、どちらか言えば何か問題のある演奏会の方が多い。その理由の一つは私があまり「売れていない」演奏家だからであろうが、おかげで笑い話になるようなエピソードには事欠かないので、ここにその幾つかをご紹介します。

「高級なピアノだからと安心すべからず」

高名なピアニストの中には、演奏会場に必ず自分のピアノを持ち込む人がいる。今は亡きホロビッツ、ミケランジェリなどはよく知られている例である。そこまではいなくても、ピアノにうるさいピアニストは大勢いる。彼らは、演奏会の前、用意されたピアノの具合が思ったようでなければ、調律師にとことんまで文句をつける。いい演奏をする為にはいい楽器が必要だから、これはごく当たり前の事ではある。

しかしながらこれもひっぱりだこのピアニストの場合にのみ可能であり、私のような無名の者は、行った先でどんな楽器にあたろうが、文句を言わずに弾くしかない。それでなければ断られてしまうのがおちである。多くの主催団体、つまり地方自治体や文化協会のたぐいは資金難で、ピアノにお金がかけれないのだ。

そういうわけだから、会場にスタインウェイの真新しいフルコンサートでもあろうものなら、「これでまず今夜は成功まちがいなし」とひと安心する。ピアノが良ければ同じ演奏でも効果的に響くし、それにスタインウェイは何といても弾き易い。それがこのピアノの最大の長所であり、大抵のピアニストがスタインウェイを好む所以である。

しかし、安心してばかりもおれない時がある。それは、バート・ナウハイムという温泉場での事。そこでさる記念演奏会に出演した。会場は立派な大ホールで、舞台にはその日のためにどこから借りてきたスタインウェイのフルコンサートが置かれてあった。調律は既に済んでいます、との事だった。ところが試弾してみたところ、弱音ペダルを一旦使うとその後ずっと弱音のままで、もと通りの音にならない。グランドピアノは、弱音ペダルを踏むと鍵盤全体が少々移動し、通常なら2本か3本のピアノ線を同時に叩いているハンマーが一本しか叩かなくなって音量が減少するしくみになっているが、このピアノの場合、移動した鍵盤がペダルを緩めた後も元の位置に戻らず、移動した位置で止まってい

るので、弱音のままになってしまうのだ。正常の位置に戻す為には、両手で鍵盤を押し戻すしか方法が無い。こういうピアノの故障を修理するのも調律師の仕事なのだが、弱音ペダルの検査を怠ったに違いない。

「このままでは駄目です、ショパンを弾くのに弱音ペダルを使わない訳にはいきません、これではとても演奏できません。」と必死で訴えた。演奏会の主催者がそのピアノを担当している調律師に連絡を取ろうとしたが、あいにく日曜日で、調律師はどこかへ雲隠れしてしまい、全く連絡がつかない。無責任なものである。しかたなく、近隣の町を探しまわって別の調律師を見つけた。ポーランド人の若い人で、はたしてスタインウェイのフルコンサートを扱った経験があるのかどうか怪しかったが、「何とかやってみます、お任せください」と威勢はいいし、何しろ緊急の場合である。まあいいか、と修理を依頼した。ピアノの持ち主がその場にいたら大反対したことだろう。メルセデス・ベンツの修理をトラヴァント（東独の大衆車）の修理工に頼むようなものだ。一時間ばかり経って、「出来ました」というので、再び試弾してみると、なるほど、弱音ペダルはまともに機能するが、そのかわり、今度は最高部の鍵盤のいくつか、一度押さえたら最後、戻って来なくて、音は鳴り続けた。これでは弱音ペダルの故障よりさらに致命的ではないか！

このままでは全く演奏出来ない。演奏会の開始時間はせまってくるし、演奏者である私も主催者もおおいに慌てた。やはり、訓練を十分に積んでいたかどうかも疑問な、このような調律師に大切なスタインウェイの修理をまかせたのは間違いだったようだ。「元通りにしてください。」と厳命し、やっとのことで間に合わせてもらった。まあ、元通りに出来ただけでも良かったというものだ。取り返しのつかない損傷が起こることだって充分にあり得るのだから。もと通りだから、高音が鳴り続けたりはしないが、弱音ペダルにより移動した鍵盤はそのままの位置で止まったまま。そういう『特殊な』ピアノで演奏会をしなければならなくなったのである。

この演奏会では私以外にもう一人ピアニストがいて、ヴァイオリンとのデュオでベートーヴェンのスプリングソナタを演奏会の最初に弾いたが、その時、15歳くらいのピアニストの息子が譜めくりをしていた。彼らの演奏後、「どうなりましたか」ときくと、「ボクが鍵盤を押し戻す役目もしたのです。何とかなりましたよ」というので、私も続いてホルンの伴奏で出演した際には、その少年を譜めくりとして起用し、弱音ペダルを通常どおりに使用した。そのつど彼が鍵盤を押し戻してくれたので、演奏に支障はなく、利発な少年との『共演』はむしろ楽しいくらいであった。

しかし演奏会の最後、ソロでショパンのスケルツォなどを弾いた際には、彼が「ボクも一緒に行って鍵盤を戻した方がいいですか？」と聞いてくれたけれど、「いや、何とか弱音ペダル無しで弾いてみますから。」と断った。譜面が無いのに譜めくりが付いてきて、時折鍵盤に手を触れていたら、観客は不審に思うだろうし、早いパッセージの最中に彼の手と衝突する危険もある。それに、思いがけぬところで鍵盤が横揺れしたらめまいがするかも知れない。

残念ながら「弱音ペダルなし」をいきなり本番で実行するのはそう簡単ではなかった。踏む癖がついているから、何回か忘れてペダルを踏んでしまい、そのあとは弱音ペダルのかかった状態のまま必死に強く弾き、機会をみつけては瞬時にググッと鍵盤を押し戻す、というアクロバット風の作業をしなければならなかったのである。

スタインウェイのフルコンサートだからといって必ずしも信用はできない。名器も故障することはある、いや、名器の方が故障しやすい。考えてみれば、私が演奏中にピアノ線を切ったのもスタインウェイが一番多い。担当の調律師は演奏会まで居残るか、少なくとも居所を明らかにしておくべきだと思うが、そこまでなかなか徹底することが出来ないのが現状である。

「音楽会騒音その1. 教会の鐘」

フランクフルトの近郊都市、ハナウの市中にある民家で、家の主人の60歳の誕生日、即ち還暦のお祝いに演奏会をして欲しいと依頼された。還暦という考えは勿論ドイツにはない。しかし、50歳、60歳、といった区切りのいい誕生日を特別に祝うのはヨーロッパの風習で、その祝い方は日本の比ではなく、結婚式がもう一度来たくらいに盛大である。

この誕生祝いは、「ピアノリサイタルを客に聴かせる」という、ありきたりの誕生パーティーとは異なった発想に基づいており、しかも「ブラームスのパガニーニ変奏曲をプログラムに含めること」という条件つきである。超絶技巧で客を楽しませよう、という趣向らしかった。希望された曲が難しい割には、提示された報酬は少なかったが、まあ、そんなことはどうでもよい、弾けるならそれでよろしい、と引き受けた。演奏家資格試験のすぐ後で、難曲のレパートリーは豊富だったからだ。

開始時間は午後5時で、ベートーヴェンのワルトシュタイン、ショパンのバラードなどを順調に弾き進んだあと、最後の「パガニーニ変奏曲」になった。一集と二集の連続演奏である。この曲は試験でも弾いた得意な曲ではあるが、何分にも技術的に大変難しいので、演奏のつど、最高の集中力を要する。

何とか無事に前半をクリアしかけ、第一集の終曲を弾いている際に、家の真ん前にある教会の鐘が大音響で鳴り出した。午後6時になったのだ。ヨーロッパではどこでも、教会のあるところなら鐘が鳴るが、そのタイミング、回数などは場所によって違う。ミサの開始前に、人々を教会に誘うように鳴らすのが一番一般的で、お葬式（葬送ミサ）の際にも鐘が鳴るのは、ヘミングウェイの「誰が為に鐘は鳴る」の表題が示すとおりである。また、その日の始まりと終わりを告げるため、朝6時と夕方6時に鳴る所もあるし、昼食時間を知らせるべく、正午に鳴らすところもある。鐘の鳴る回数についていえば、ほんの数回鳴らして終わることもあれば、除夜の鐘のごとく延々と鳴り続ける事もある。この方面の研究をしている訳ではないので自信はないが、多分、いつ、何回鐘を鳴らすかについては、各教会がそれぞれの伝統と教区信徒の希望によって決めているのだと思う。知人の話によれば、昔はどこでも一時間ごとに鳴ったそうであるが、住民の苦情により、その頻度はどんどん少なくなり、今に至っているとの事である。教会勢力の衰えと平行関係にあるのだろう。

ともかく、そのハナウの家では、前の教会が毎日夕方6時に鐘を鳴らすのに、家の主人がそのことを考慮するのを忘れていたのだ。何しろ難しいパガニーニ変奏曲一集の終曲を弾いている最中だし、何としてでも早く最後まで行き着きたい。「そのうち止むだろう」と思いながらしばらく弾き続けたが、あまりのうるささに、自分のピアノの音も聞こえない。客にも聴こえていないに違いない。これではこれ以上弾いても無意味なので、弾くのを止め、鐘が鳴り終わるのを待つことにした。何と、20分間、延々と鳴り続けたのだ！鳴り終わったところで、先ほど止めた部分、つまり第一集の終曲から弾き始め、続けて第二集を弾いたが、もはや当初の集中力はどこかへ行ってしまい、かなり投げやりで不本意

な演奏になってしまった。

難曲を演奏するのは、スポーツ的な面が多く、フィギュアスケートで難しい技術をこなすのと似たところがある。全ての体力と精神力を注ぎ込んで、難しさを克服しながら美しさ、芸術性を表現しないといけない。演奏家はぎりぎりの所で弾いているのだ。それゆえ、何らかの障害により精神の集中が出来ない場合には、非常な困難に陥る。プレッシャーがかかった選手が十分に活躍できないのと同じである。従って、いい演奏を聴きたければ、演奏家が十分に集中して実力を発揮できるように、主催者は気を配らないといけない。勿論教会の鐘の時刻も、ちゃんとプログラムのタイミングの計算にいれておくべきだったのだ。あの終わり無き大騒音を忘れるとは、随分のんびりした人である。

「音楽会騒音その2. パトカーのサイレン」

イギリスのさる上院議員の女性が亡くなったしばらく後で、その方の追悼ミサが行われ、そこで演奏することを頼まれた。彼女はロンドンのショパン協会設立者の一人であり、私はその方のお世話でロンドンで演奏会を開かせていただいた事がある。彼女の生前の好みに従って、ハイドン、バッハ、ショパンを演奏することになっていた。場所は、上院議員の追悼ミサにふさわしく、ロンドンの最中心地、ウエストミンスターにあるマーガレット教会で、ビッグ・ベンなどとも隣り合った由緒高いところだ。最初に、招待客が全員集まって教会の入り口が閉ざされると、ハイドンのへ短調変奏曲を演奏し、それが終わった所で、聖職者がゆっくりと入場行進してきた。彼等が着席した後、バッハの平均率一巻ト短調を演奏。静まり返った沈痛な雰囲気の中で、物悲しいプレリュードが終わり、フーガが始まった。

それを半分くらい弾いたとき、突然、けたたましい音でパトカーのサイレンが鳴り出した。なにしろ大都会ロンドンのこと、パトカーのサイレンは日常茶飯事であるが、これはどうにもタイミングが悪い。まるで教会の中で鳴っているようにうるさく、その音たるや、ネズミ花火が跳ね回っているように連続的で我慢のならないものである。日本やドイツのパトカーのウーウーやピーポーピーポーなんて、これに比べれば静かなものだ。これではとてもバッハのフーガを落ち着いて弾いていられる雰囲気ではない。とはいえ、荘厳なミサの最中であり、演奏を止めるなんてとんでもない事である。ともかく、譜面を忘れてしまわないで弾き続けなくては。「しまった、楽譜を見て弾いたらよかった、畜生！」などと心の中で呪いの叫びを上げつつ、必死に神経を集中し、何とかその危機を脱して最後までいきついた。

このミサは全部録音され、のちに CD をいただいたので、聴いてみたら、パトカーのサイレンが始まるや、フーガのテンポがやや速くなって、心の安定が崩れているのがよく分かる。まったく冷や汗ものである。こういうリスクの多い状況で演奏する際には、妙な自尊心は忘れて手元に楽譜を置いておくべきである、という教訓が得られた。

話はそれるが、最近では携帯電話による演奏会の妨害がちょくちょく起きている。幸い私は今まで被害にあっていないが、先日、非常に気の毒ではあるけれども愉快的出来事に遭遇したので、それをここでご紹介する。場所はライブチヒ高等音楽院内のコンサートホールで、それは中国人作曲科学生の最終試験であった。演奏される曲はすべてその学生がその試験のために作曲したものであるから、全部初演であり、ライブ録音されていた。CD にするつもりなのであろう。彼にとってはまさに一生の大事である。それというのも、そういう新曲をちゃんと練習して演奏してくれる人達を見つけるのは生易しいことではないので、ここで演奏された曲が一度限りで忘れられてしまう可能性はかなり高く、この日の録音は彼にとって非常に貴重なものなのだ。彼自身、二度とは聴けないかもしれないのだ。

ピアノソロ、歌曲、室内楽など色んなジャンルの曲が演奏されたが、勿論すべて無調音楽

で、クラシックな楽器を使用してはいるが、音の出し方も現代曲らしく型破りだ。殴ったり引っ掻いたり、また弓の木の部分で弾いたり、その楽器らしからぬ音を造りだしている。プログラムに添えられた作曲者の言葉によれば、「書道芸術を音で表現した」との事だ。そう思って聴けば、そんな感じはしないでもない。

さて、プログラムの中ごろで、弦楽四重奏曲を演奏中に、客席の後ろの方で「ピー、ピッピッピー」という、ピッコロのような音がし始め、繰り返し鳴りつづけているので、私を含め多くの聴衆は、咄嗟にそれを曲の一部だと思った。演奏者の一部が客席で演奏するのは珍しいことではないし、それにこれは新曲であるから、どのような変わった趣向が凝らされていても不思議はないのだ。そしてそのような趣向は、多ければ多い程いいのである。そうは言っても、あまり同じ音形の繰り返しが続くので、これはひょっとすると携帯電話では、と気がついて、音の聞こえてくるあたりに眼をやると、一人の中国人らしい女性が顔を真っ赤にしてハンドバックの中を探し回っているのが見え、やはり切り忘れた携帯電話である事がわかった。私と一緒にいた作曲家の友人は、「これは弦楽四重奏と携帯電話のための五重奏曲だねえ」と言いつつ大いに笑ったが、はたして作曲者はそれでよかったのか、そこのところは定かでない。

そこで気の毒な作曲者への私からの提案だが、この曲を「弦楽四重奏とピッコロのための云々」と適当に改名し、楽譜にも携帯電話を模したピッコロの音を書き加え、CDと共に売り出すことにしてはどうだろう。その方が録音をもう一度やり直すよりよほど手っ取り早いのではないか。

「舞台照明の重要さ。鍵盤も手も真っ赤っか」

フランクフルト郊外の小都市バート・ホンブルクでは毎年、夏の最中に大規模なお祭りが催される。バート何とか、という名前の町はすべて温泉町か、もと温泉町であり、過去には有名、無名の政治家や芸術家が保養に訪れて栄えていた場所である。しかし、医学の発達した現在では温泉で保養する人の数は減ってしまったので、多くの温泉場は経済的困難に陥っており、生き残り対策に頭をかかえている。その中であって、このバート・ホンブルクはドイツ経済界の中心地フランクフルトから通勤電車で20分という有利な立地条件のおかげで、銀行家など富裕層の住宅地として今でも結構栄えている。

さて、ある年の夏祭りの際に、野外でピアノ演奏会を開いて欲しい、との依頼が来た。プログラムなどは事前に手紙で取り決め、当日はリハーサルのため、早めに出かけた。行って見て驚いたことには、グランドピアノが池の中に人工的に作った島の上に置いてある。そのピアノは緑色に塗られ、赤い大きなリボンが描かれている。これだけでも、現代美術の一種として通用しそうだ。そして演奏会の開始時間になったら、魅力的な若い日本女性(?)が、岸辺から細い橋を渡ってその島に行き演奏する、という趣向なのだそうである。「自分たちはアイデアに富んだ団体なのです。」と主宰者は得意げだ。これはなかなか面白い。斜陽のクラシック音楽にとって大衆を獲得する工夫は非常に大切だ。それなら私も一役買ってあげましょうと、リハーサルなどはそこそこにし、華々しい舞台衣装に着替え、念入りにお化粧をして本番を待った。本番は8時始まりだったが、まだそのころは十分に明るくて、人工照明の必要はなく、夕暮れ時の柔らかな自然光のもとで気持ち良く演奏できた。

ところが、ところがである。最後の曲を弾く9時ごろになると、ヨーロッパの夏は日が長いと言っても、さすがにかなり暗くなってきた。「こんなに暗くて弾けるかなあ？」と思いつつお辞儀をした途端に、真っ赤なスポットライトで照らされた。これも自慢のアイデアの一つであるらしい。リハーサルの時は明るかったので照明のテストはしていなかったのだ！これは全く想像もしていなかった。「こんな馬鹿な事ってあるかしら、どうしよう？」と一瞬動揺したが、まわりは既に何百人もの観客で埋まってしまっているのだから、「ちょっと待って、」とクレームをつけるのは現実としてなかなか難しい。ましてや私は人に文句をいうのが苦手で、なるべく自分が我慢をして丸くおさめたい、という意気地なしである。せっかくこういう突飛な演出を思いついた主催者と照明係りに公衆の面前で恥をかかせるのも気の毒だ。逆に怒らせて次回からお声がかからなくなったら大損ではないか。それに白いライトを準備してあるとは限らないし...

かように咄嗟に色々考えた挙句、あたかも何事も起こっていないかのように、にこやかに座って弾こうとしたが、なんと、白いはずの鍵盤は真っ赤、鍵盤に触れようとする私の手も真っ赤で血だらけのよう、不気味でとても見ていられたものではない。それに、オリエンテーションの感が狂ってしまい、どこへ手を持っていったらいいのかも判らないくらいだ。

プログラムの演奏曲目はシューベルトの「さすらい人幻想曲」で、リストやブラームスのように大跳躍がいっぱいあるわけではないとはいえ、運動量が多くて難しい曲である。それに、曲想から言っても、この赤いライトにはまるでそぐわない。タンゴでも弾くのだったらともかく。やはり普通の白いライトに変えてくださいとお願いしてみようか、とまた一瞬迷ったが、一旦座ったのに立ち上がるもの気が引ける。抗議すべきタイミングはとうに逸してしまっているのだ。ままよ、と思い切って、最初の和音をどうにか見つけたあとは、常時上を向いたまま、一切手元を見ないで演奏した。

こういう窮地に陥った場合、「火事場の馬鹿力」ではないが、人は案外に強くなるもので、演奏は最後までさほどのミスなく無事終了した。盲目で見事に難曲をこなすピアニストもいるから見ないで弾くのは可能なのであろうが、そういう訓練を積んでいない私は、視覚の助けがなくては通常ならこの曲をミスなしに弾けるわけがない。かくして、野外演奏会は主宰者も照明係も得意満面のうち、大成功裏に終わった。私はといえば、せっかくの満ち足りた気分には水を注すのもと、照明については一言も言及せず、和気藹々と別れた。どうせ来年はまた違ったアイデアなのだから、今さら言ったところで何の役にも立ちはない。

暗順応が足りなかったブラームスの協奏曲

言うまでも無く、演奏家にとって舞台照明は成功、不成功を左右する極めて重要な要素である。それゆえ、普通の演奏会場なら事前に必ず照明のテストをし、鍵盤に大きな影が映ったり、演奏中に視線が行くところに強い光源があって目くらましをされたりしないように気をつける。しかし時には予想外の事態が生じる。

前章で述べた例以外に、私が経験したもう一つの場合は、フランクフルト音大の卒業試験の時であった。その試験では、前半にスカルラッチェ、ラヴェルなどのソロの曲目を演奏する他に、作曲科の教授であったクライン氏のトッカータの初演を行い、その後すぐ続いてブラームスのピアノ協奏曲第2番をもう一台のピアノに伴奏してもらって演奏した。こんなハードな曲目を続けさまに弾くのは試験の時くらいである。

前半が無事終了した後、短い休憩中に、伴奏用のグランドピアノが今まで弾いていたピアノの横に並べられたが、その際、一台目のピアノは今までより1メートルばかり観客側に移動させられた。ブラームスを弾くべくピアノの前に座ったところ、鍵盤の、特に右半分がいやに暗くなっている。舞台中央にある光源から遠くなってしまったからだ。それでも他の受験生は誰も文句を言っていないのに私だけ文句を言うわけにもいかないし、予定どおりに弾き始めたところ、暗すぎるために感が狂って、高音部で大音響の不協和音を鳴らしてしまった。これではブラームスというよりストラヴィンスキーである。

そのうちだんだんに眼が暗順応して鍵盤が見え始めたので普通に弾けるようになり、試験は何とか合格したが、後でピアノの先生が「君はちょっと上がっていたのかい、あんな間違った和音を弾いた事は今まで無かったのだがねえ」と言われたので、「暗くてよく見えなかったからです。」と弁解したところ、「暗かったって？」と、信じられない、という顔をされた。どうやら、ただの言い訳だと思われたらしいが、これはれっきとした真実なのである。私はこの出来事に真に医学的な説明を加えることも出来るのだ。

以前にマックス・プランク研究所で眼科学の研究をしていたころ、視覚誘発電位（人が物を見たときに検出される脳波）を使って、アジア人とヨーロッパ人の視覚特性、つまり見え方、を比較する実験をしたことがある。その結果、目の黒いアジア人は、ある範囲内においては、光が強くてコントラストが強い程よく見え、明るさとコントラストが低下すればそれに従って急速に見えなくなるのに対し、目が青かったり緑色だったり薄茶色だったりするヨーロッパ人は、薄暗くてコントラストが30パーセントと低いところでもよく見える、と言う事が明らかになった。そのかわり、彼らは光の強度とコントラストが強すぎると眩しくて逆に見えなくなってくる。これはメラニン色素の含有量の相違によるものと思われる。

この実験により、私がドイツに来て以来、常々感じていた「ドイツではどこもかしこも、どうしてこんなに暗いのだろう」という疑問が解明された。要するに、ドイツ人は、日本人より暗闇に強いのである。そしてまた、彼等が光の強い野外では常にサングラスを愛用する理由も明らかだ。ファッションの為でも変装するためでもなく、単に、眩しくて

それが無ければよく見えないからなのだ。ヤクザが色眼鏡で自己主張するのとはわけが違うのだ。ただしこの実験結果は論文にはしなかったし、豊富に集めたデータも既に失われているので、私の頭の中にあるだけである。異議のある方がおられたら、実験をやり直していただきたい。ともかく、この見え方の違いのため、ドイツ人なら全く問題が無かったであろう鍵盤の薄暗さが私には大きく影響したと思われる。

最近アジア人学生の割合が急速に増加し、どこの音楽大学でもヨーロッパ人を凌駕している。それ故、舞台照明も多数派に合わせて明るくすべきだと思うが、多分、誰もそんな事に気付いてはいないだろう。

「モーツァルトの協奏曲でのハプニングの数々」

以前フランクフルトに住んでいたとき、ある企業の合唱団を指揮している方とお知り合いになり、合唱団の定演の際に毎年のように色々なモーツァルトのピアノ協奏曲をこの人の指揮のもとで演奏した。協奏曲は全部で27曲もあるのだから、選り取り見取りである。オーケストラは音大の学生やフリーの音楽家の寄せ集めで一応はプロの集団だが、指揮はなんとも下手くそで、居ない方がいいくらいだ。それでもなにぶんとても人のいいお爺さんなので、みんな我慢していた。

ある協奏曲の終楽章で、ピアノとオーボエが掛け合いになっている箇所で、オーボエが1小節遅れて演奏した。分かりにくい指揮だから無理もないが、私は非常に困った。オーボエに合わせて一小節遅らせるべきか、指揮者に合わせてそのまま弾き続けるべきか。本来ならオーボエが気付いて合わせるのが当たり前だが、直前に雇われたエキストラなので、ピアノとの掛け合いであることに気付いていない様子だ。結局、大事なメロディーを弾いているオーボエに合わすしかない、と咄嗟に判断し、自分も一小節ずらして演奏、指揮者とオーボエ以外のオーケストラ全員を振り落とした。

あちこちで不協和音が鳴り続けるなか、ピアノとオーボエのデュオを続け、楽章の終わりに近いカデンツァ（楽章の終わり近くで、ソリストがオーケストラ無しの即興的演奏を行う部分）直前の大休止に到ってやっと全員が一緒になった。斯様にカデンツァはとても役に立つのだ。それまでばらばらになっていても、ちゃんと全員一緒に終わることができる。めでたし、めでたし、である。

この指揮者とのもう一つの忘れ難い思い出は、電気ピアノでモーツァルトの協奏曲を演奏したことだ。この楽器（どのメーカーの何という楽器だったかは記憶にない）がそういう曲の演奏に向いている、とはとても言えないが、まあ、仕方がなかったのだ。

それは、東西ドイツ統一直後の1990年のこと。この人はゲッティンゲンに近い旧東ドイツの田舎町の出身で、若いときに西側に亡命した人なので、冷戦中には滅多に生まれ育った故郷を訪ねることが出来なかった。そこはもとの東西ドイツ境界の直ぐ東側で距離的にはさほど遠く無いにもかかわらず、実際上は限りなく遠い場所であったのだ。それゆえ、ベルリンの壁に穴が開くや否や、故郷に錦を飾るべく、懐かしいその町の大きな教会で自分の合唱団の演奏会をすることを思いついた。ついては、大好きなモーツァルトの協奏曲もやりたいが、その村にはどうやらピアノというものが無いらしい。いや、有ったかもしれないが、電話も完備されていなかった旧東独のこと、連絡がつきにくく、有るかどうかは判らなかったのであろう。そこで、電気ピアノ持参により、大型バスを借りて演奏旅行をすることになった。本物のピアノを持参するほどの予算は無かったからだ。教会はすばらしいバロック建築で、東ドイツの建物の多くが荒れ果てた状態で放置されていた事を考えれば、かなり良く保存されていたと記憶している。

しかしピアノ協奏曲を電気ピアノで弾くのは、やはり妙なものだった。まず、鍵盤のタッチが軽すぎてプカプカと頼りない感じだ。ペダルもプカプカだし、それにすぐに逃げ

てしまってどこにあるのか判らなくなる。さらには、ピアノの音が自分の弾いている楽器とは全く違った所から聞こえてくる。こんな事も、キーボードに慣れていない私には変に感じられる。それになんと言っても馴染みの無い、奇妙な音だ。電気音はいくら改善した所でやはり電気音、本物の木から出る音ではない。(もっとも、最近の電気ピアノはかなり改善されたと聞くが...)しかし考えてみれば、モーツァルトの時代のピアノも、現代の我々のピアノとはまるで違っていたのだし、電気ピアノの音にモーツァルトが異議をさしはさむ事もあるまい。そう割り切って考えることにし、気持ち良くとはいかないけれども、無難に演奏した。そして、我が指揮者は故郷での記念すべきイベントに大喝采をあげる事ができたので幸福の絶頂であった。お付き合いした我々もやりがいがあったというものだ。

さて、私はここで、もう一つのモーツァルト協奏曲にまつわるエピソードを語るが、これは今までひた隠しにしていた秘密の告白である。それは今を去る事10年余り前だが、某州医師オーケストラと、あまり頻繁には演奏されない協奏曲を共演した。このオーケストラは失礼ながら上手とは言い難いオーケストラなので、ピアノパートをあまり熱心に練習する意欲が湧かず、適当に気楽に弾いていた。ところが、そういうオーケストラであるのに、どういうわけか、予定していた演奏会より早くに、マンハイムでの医学学会の出し物として急遽出演することになった。私はその話を聞いてからも、そのローゼンザールなる会場を知らなかったので、直前まで相変わらずごく軽く考えていた。

当日、会場へ行って驚いた。2千人くらいも入る大会場で、しかも殆ど満席なのだ。これには慌てた。こんな凄いところでこのオーケストラと弾くことになるなんて、まるで予想していなかったからだ。精神の安定を失ったためか、あろうことにも私は一楽章の演奏中、楽譜2行分ほど弾き忘れて跳ばしてしまった。これは、協奏曲では絶対やってはいけない事である。オーケストラ団員は、ピアノと合っていないことに気付き、一人、一人と演奏をやめていき、終にはピアノの独奏になってしまった。指揮者は大慌てで、必死に「第何小節！」とか叫んでオーケストラに弾かせようとしたが、誰も弾き始める勇気のある人はいない。私は勿論それに気付いていたが、途中で止めるわけにはいかない。そのまま一人でがむしゃらに弾き続け、カデンツァまで行き着いて、やっとオーケストラと一緒に終わった。この時もカデンツァに助けてもらったわけである。

第2、第3楽章は事なきを得たものの、折角の晴れ舞台をめちゃめちゃにした私への指揮者とオーケストラ団員の恨みは深い。私は申しわけなくて打ち上げ会では平謝りである。ところが、その時分かったことによると、オーケストラ団員はみな、自分が間違えたのだとばかり思っていたのだそうだ。「あれ、変だな、と思ったけど、ピアノは実になめらかに鳴りつづけているから、ピアノが間違っているとはとても思えなかったので、自分が間違っただけだと思っただけだ。」と団員の一人が語っていた。また、聴衆も、どうやら一人残らず、オーケストラが落ちたと思ったようだ。「やはり、あのオーケストラは下手だねえ、駄目だねえ」という声が何度も聞こえてきた。その時、正直な人間なら、「いえ、間違っ

のは私で、オーケストラに罪はありません」とすぐさま声高に言うべきところであるが、卑怯な私はそんな巷の声は聞こえていないようなふりをして黙秘を続け、結果的に罪をオーケストラになすりつけたのである。御免なさい！

以来、それに懲りて、協奏曲を弾く場合には、オーケストラの上手下手にかかわらず念を入れて練習するようになったので、あんな大失敗は幸いにして繰り返していない。当然のことながら、このオーケストラからの共演依頼は二度と来ていない。

「振袖での演奏」

バイエルン州の都市、アシャッフエンブルクに古くからの友人のソプラノ歌手が住んでいる。彼女は私より10歳以上年上でその地方の名士であり、声の方はもうあまり出なくなっているが、しばしば自分で大衆受けのする企画を立て、知人の音楽家を雇って演奏会を主催している。そのおかげで私は何度も出番にありついているが、彼女の旦那さんが服飾関係の会社を営んでいることもあり、彼女は服装に敏感である。

そして数年前より、日本人の私にもっとも似合うのは着物である、と確信していて、演奏の依頼の際には「着物を着て」という注文がついてくる。ここで「着物」というのは華々しい振袖のことであり、地味な付け下げなどではないので、私は恥知らずにも年齢にかかわらず毎回振袖を着て出演している。日本の伝統文化を西洋に誤って伝えている、とのお叱りを受けるかもしれないが、まあ、許して頂きたい。

さて、約1年前、彼女が主催したショー的な演奏会があり、大劇場で歌手、合唱団などを動員した総合的イベントに振袖で出演した。「この晴れやかな日のために、船に乗ってわざわざ日本からやってきたマリコさん」というエキゾチックな役割を演じるのである。時折、お喋りをしたりピアノを弾いたりするように台本が出来上がっている。日本から今着きました、こんにちは、と舞台上上がって最初に演奏したのが、事もあろうにショパンの英雄ポロネーズであった。事前に演奏会の模様がよく判っていなかったので、「何か華々しい曲をお願いします」と頼まれてこの曲に決めてしまったのだが、本当はもっと簡単な曲でもよかったのだ。華々しすぎだ。しかもう、後の祭りである。

着物が窮屈だなあ、と思いつつ弾き始めた。振袖自体は長い袖を膝の上に載せておけば格別邪魔にはならないのだが、問題は太い帯である。きつく締め付けられているものだから座ったら血行不全に陥ったらしく、両腕が痺れてきた。これは大変だ、指が動かなくなったらどうしよう、と気が気ではない。それに、この曲には真ん中のあたりで長い左手の連続オクターブがある。腕の血行がよくなければ、あれは最後まで持たない。何とかこの締め付けを今のうちに緩めなくては。そう思って、弾きながら上体を必死で大きく揺り動かした。すると、胸を押さえつけている圧力がだんだんに低下して腕の痺れがとれ、問題の箇所に来るところには正常になって普通に演奏できた。やれやれ。しかし今度はひどい着崩れだ。演奏後、舞台上で人目につかぬよう修正するのに苦労した。

いつか、テレビで蝶々夫人を見ていたら、「ある晴れた日に」を歌う直前に、日本人のソプラノ歌手が帯をぎゅうっと押し下げているのを見たことがある。美しい着物はやはりかなり厄介な代物なのだ。

着物が窮屈で演奏しにくいことは上述したが、それでは、他国の民族衣装はどうだろうか。チマチョゴリは未だ試す機会が無いが、チャイナドレスは経験がある。あるとき、ライブチビに住む胡弓の名手の中国人と知り合った。彼は北京で中国伝統楽器による交響楽団に属していたれっきとしたプロの音楽家であったが、いかなる事情によるものかドイ

ツにやってきて以来、中華料理店を経営し、結構成功している。彼の店は「本物の、中国人による中華料理を食べさせる店」としてライブチビでは有名だ。それというのも、ここにはベトナム人のやっている中華料理店が多いからだ。そして毎晩、自分の店で胡弓を演奏してそれを店のアトラクションにし、それでますます店は繁盛、というわけである。

この人とピアノと胡弓のデュオを組んで、何度もドイツ各地で演奏した。彼は、こんなにちやちな楽器でどうしてここまで表現できるのだろう、と感心するくらいの人である。演奏中は音楽そのものになりきっていて、悲しい曲だと本当に泣きながら弾いたりする。だから、巨大なグランドピアノとでも、音量さえ加減すれば見事に共演できるのだ。もっとも、そういう組み合わせの曲は少ないし、また残念なことに、彼はレストラン経営の方に熱心のあまり、新しい曲を見つけて取り組もう、という意欲に欠ける。それゆえ、いつでも、どこへ行っても殆ど同じプログラムを弾いている。それでも、珍しさのおかげで、毎回大成功だ。そのつど、私はチャイナドレスを着て中国女性に扮装した。民族楽器による演奏会なのだから、それは妥当なことであろう。チャイナドレスはほっそりしているが、スカートの両脇に大きなスリットがあるから、窮屈でなく、演奏しやすいので気に入っていた。

ところがある時、誰かが私達の演奏中の写真を撮ってくれたのを見たら、ピアノに腰掛けている私のドレスはスリットが太腿のあたりまで大きく開いて、まったく赤面ものである。どうして誰もその事を私に言ってくれなかったのであろうか。あわてて次回にはスリットを20cmばかり縫い縮めた。すると、今度は窮屈になり、演奏中に、縫い縮めた糸がぷつぷつと音を立てて裂けた。演奏中にはペダルを踏んだりバランスを取ったりと、脚も結構大活躍しているからだ。それなのでチャイナドレスもピアノ演奏には格別向いていない、と言わねばなるまい。

「演奏前にはコーヒーを飲みすぎない様に」

もう15年くらい前のことであるが、その頃一緒にピアノとチェロでデュオを組んでいたエジプト人のカーメルという男性と、ある小都市に招かれてデュオの曲ばかりの演奏会をした。カーメルはあまり練習熱心ではないが、才能に恵まれた優秀なチェリストである。発展途上国出身の音楽家にはどちらかいうとこういうタイプが多い。例えばアルゲリッチがあまり勤勉でないことは有名である。

演奏会場でリハーサルをした後、演奏会までの待ち時間に、主催者である市長が私達を自宅に招き、コーヒーを出してくれた。ドイツ人は「コーヒーカンタータ」でうかがい知れるように、バッハの昔からコーヒーが大好きで、朝食時から夕食後に到るまで一日に何回も飲む。そのせいか大抵の人は中毒気味だ。非常に強いコーヒーを多量に飲むのが普通で、それでないで飲んだ気がしないらしい。私が通常自分で沸かすコーヒーなどは薄すぎて、大抵のドイツ人に「これは紅茶か？」と馬鹿にされてしまう。コーヒーの色は透けて見えるようでは駄目で、全く光を通さないくらいに濁って黒々としていなくてはいけないのだ。イギリスが紅茶の国なら、ドイツはコーヒーの国と言えよう。そう言えば、バッハがトーマス教会音楽長を長年務めたライプチヒには、ヨーロッパで一番古いコーヒーハウスのひとつとされるカフェ・バウムがある。そしてそこは今から170年も前に、かのローベルト・シューマンが常連で入り浸っていた所だ。シューマンもコーヒー中毒だったものと思われる。そのことが彼の狂気とどう関係があったかについては知るよしもないが。

それはともかく、この時いただいたコーヒーも非常に強く、カップ一杯飲んだだけで心臓がどきどきし始めた。とてもそれ以上は飲めないで、苦勞して2杯目をお断りした。しかしカーメルは勧められるままに、市長に付き合っ2杯以上飲んでる。それを見て、エジプト人は強いコーヒーを飲んでも平気なのだろうと思っていた。そして約30分後に、演奏会が始まった。室内楽の演奏会では、通常、ピアニストをふくめ、全員が楽譜を見ながら弾く。それには深い理由があるので、そのことについては次章にて詳しく述べる。楽譜があるのだから、ピアニストは立ち往生する心配が無くて安心、と思われるかもしれない。その通りではあるが、室内楽には、また別の難しさがある。例えば私のパートナーのカーメルなどは、その時その時の気分により演奏のやり方を変え、本番で突然に大きな「間」を取ったりするので、私はチェロの弾き方にすばやく反応し、自分も違った演奏で答える必要が生じる。これが室内楽の醍醐味であって、ピアニストは臨機応変でなければならぬ。その際、譜面がなくてはどうしようもないのだ。いつも全く同じ演奏をしてくれるのだったら話は別だけど、それでは面白味がないというものであろう。

デュオの演奏会の話に戻ろう。私はさほどの緊張も感じずにいくつかの曲と一緒に演奏したあと、ベンジャミン・ブリテンのチェロソナタになった。この曲は全部で5楽章あり、形式から言えばソナタというより組曲である。第2楽章のスケルツォを弾き終わった後、物悲しく静かなエレジーの出だしのピアノソロを弾こうとした途端に、カーメルが大

音響で第4楽章の行進曲を弾きはじめた。第3楽章を弾き忘れたのだ。私は咄嗟にどうしたらいいのか分からず、呆然としていると、しばらく猛然と独奏を続けていたカーメルが弾くのをやめ、怪訝そうな顔を非難がましくこちらに向けた。「エレジー」と小声で言ったら、彼はやっと楽譜を2ページ一度にめくってしまった事に気付いた。しばし沈黙の後、しおしおとエレジーを弾き始めた。醜態をさらした後の文字通りのエレジー、哀歌であった。演奏会のあと、彼の第一言は「あのコーヒーは強かった！」だった。以来、私は演奏会の直前にはコーヒーを飲まないことにしている。多量のカフェインは、覚醒作用がある一方、正常な頭の働きを妨げることが明らかだ。これはネガティブに作用したドーピングといえよう。

言うまでも無く、人前で演奏するのは非常な精神的負担である。人前に出れば、だれでも上がる。これは緊張したらアドレナリンが全身に満ちる現象で、やむを得ない事だから、「上がった」状態でも大失敗をおこさないように演奏家は訓練を積むのだが、いくら訓練を積んでもやっぱり上がって失敗を繰り返し、心配でたまらない、その恐怖に耐えられない、という人を私は何人も知っている。

そこで、その恐怖を癒すべく密かに愛用されているのが精神安定剤である。ある時、某音楽大学のヴァイオリン教授に志願した友人に付き合っ採用試験で伴奏した。彼はバッハのソロソナタ1曲とブラームスのヴァイオリン協奏曲を弾いたが、何とも精彩の無い演奏をしたので、当然ながら教授には採用されなかった。しばらく後で彼が「自分の演奏をどう思ったか」と聞いてきたから、正直に「なんだか退屈な演奏だった」と答えた。すると、「やっぱりそうか、実は自分は事前に精神安定剤を飲んだので、非常に落ち着いて演奏出来、うまくいったつもりだったのだ。それなのに演奏が良くなかったと審査員に言われて憤慨していた。きっと精神安定剤のせいには違いない。」と言う。この人は通常はとてもしっかりとしたヴァイオリンニストなので、本当に彼の言うとおりなのだろう。こういった向精神剤の恐ろしいところは、その効果の全容が本人には自覚できない事だ。落ち着きすぎてつまらない演奏をしているのに、「うまくいっている」つもりだったのだから。それゆえ、スポーツと違って禁止されてはいないけれども、いかなる形でもドーピングはなるだけ避けるべき、というのが私の考えである。

「譜めくりが全く無能だったら」

室内楽でも暗記で弾く人達が稀にはあるが、私はあれを邪道だと思っている。室内楽でのピアニストは、常に他のメンバーの演奏を譜面で追い、チェックしながら弾く必要がある。いかに名手でも人間だから、間違える事はあるのだ。實際上、合奏中に相棒が落ちてしまって違った箇所から弾き始める、というようなハプニングはしばしばおこる。そういう場合には、聴衆に気付かれないよう、ピアニストは即座にそれに合わせてやらないといけない。ピアニストにはそういう機能が要求され、その為に、ピアノ譜にだけは他の楽器の声部も書かれているのだ。

もっとも、デュオの場合は合わせるの簡単であるが、トリオ、もしくはそれ以上の編成になると、なかなか難しい。どの人に合わせるべきか、即座に判断しなければいけない。例えばピアノトリオで、ヴァイオリンが注意を怠ったためにいきなり1小節先を引き始め、チェロは正しい箇所を弾いていたとする。ヴァイオリンもチェロも自分の声部の譜面しか持っていないので、彼らには修正の仕様が無い。ピアニストはヴァイオリンがどのように間違っているのか分かっている、そこで「1小節待て」というような指示を、演奏しながら、しかも聴衆に気付かれないようにヴァイオリンに与えるのは至難の業である。殆ど不可能である。

ならば、どうしたらいいか。その時ヴァイオリンは伴奏をしていて、チェロの方が主旋律を受け持っているなら、そのまま、チェロと一緒に引き続け、ヴァイオリンがそのうち自分で気付いて戻ってくるのを待てばよい。しかし、もし、ヴァイオリンの方が大事なメロディーを弾いていて、チェロが伴奏だったとすれば、チェロを見捨ててヴァイオリンに合わせるしかない。それでなければ曲として繋がらないからだ。そして、確率的には、この方が高い。高音部に主旋律があるのが普通だからだ。あわれなチェリストは、そのうち自分だけ外れてしまったのに気づき、弾くのを止めて、わかり易くて一緒に弾き始められる所が来るまで待つしかないであろう。すると、聴衆の側からすれば、チェロだけが弾いていないので、あたかも彼が間違っ落ちてしまったかのように見える。チェリストに無実の罪がかぶせられて気の毒ではあるが、時にはそれもいたしかたない。読者の中にも、トリオの演奏会でチェロが落ちているのを見たことのある人がおられるかもしれない。結構良く起こる事だ。あれは、必ずしもチェリストが間違っとは限らない。ヴァイオリンのせいかもしれないのだ。

さて、何度か述べたように、室内楽では譜面が非常に大切であるが、自分で譜面をめぐっていたのでは全部の音が弾けない。そのため演奏会の際には譜めくりを雇う必要があり、これがなかなか厄介である。譜めくりは、ただ譜面が読めるというだけではなく、ピアニストが譜面を追う速度にあわせ、常に一步先でめくらないと演奏の妨げになる。必死で譜面ばかり追わないといけないから音楽を楽しむ余裕などないし、通常はギャラも出ない。それに譜めくりがいくら上手だからと言って拍手してもらえるものでもない。拍手してもらえるのは演奏家だけ、譜めくりは上手で当たり前、うまくいかなかったら非難され

る。これでは誰もあまりやりたがらないのは当然である。

知り合いの歌曲伴奏者は、演奏会の際には楽譜をマイクロフィルムなみに縮小コピーし、1曲のすべてのページを譜面台上に同時に乗せられるようにして、譜めくり問題を解決している。しかしこれは、歌曲が通常あまり長くないから可能なので、各楽章が数十ページにも及ぶ室内楽ではそうはいかない。

ある時、ドイツ最古という、由緒あるハイデルベルク大学のホールで室内楽の演奏会をした。曲目は、ピアノトリオ2曲と、シューベルトのピアノ五重奏曲「鱒」。前半、ピアノトリオの演奏中には、最後の「鱒」にだけ出演するヴィオラ奏者が譜めくりをしてくれた。しかし「鱒」では5人全員出演する為、演奏者以外に譜めくりが必要で、事前から手配して「ヴァイオリンが弾けます、勿論楽譜はちゃんと読めます」というふれこみの女性にお願いしてあった。

「鱒」の1楽章と2楽章は無事に終了し、3楽章のスケルツォになった。ここにはダ・カーポ（楽章の最初に戻る）があって数ページ逆もどりしないといけない。うまくいくかどうか心配で、事前に何度も念をおしたところ、譜めくり女史は「分かっています」と自信ありげに言っていた。それなのに、ダ・カーポの近くにきて、彼女は一向に腰をあげる気配がない。「うわっ、忘れていないのじゃないか？」と思ったら、案の定、他の4人がもうダ・カーポして楽章の出だしを弾いているにもかかわらず、平気で何もしないで座っている。その間にテンポの速いスケルツォはどんどん先へ行く。私は暗譜でどうにかこうにか弾きながら「ダカーポ、ダカーポ」と叫んだ。すると、何と、彼女は譜面台から楽譜を取り上げてのろのろと探し始めるではないか。これ以上暗譜で引き続けられない。私は演奏を中断して楽譜を彼女の手から奪い返し、大至急、自分で楽章の最初のページをめくり、他のメンバーがその時までに行き着いていた箇所を探してそこから弾いて合流した。

私は彼女の無能さかげんにあきれ果てたが、彼女はどうやら自分の失敗にショックを受けたらしく、それからというものの、全く駄目になってしまった。思考停止した、とでもいうべきか、頭の中が真っ白になってしまったのであろう。4楽章の有名な「鱒」の変奏曲では、繰り返しのあるところですぐ次をめくってしまったり、めくるべき時に何もしなかったり、とめちゃめちゃで、邪魔になって仕方がない。「私が自分でやりますから、触らないでください。」と言ってそこから終わりまで全部自分でめくった。勿論、しばしば音を省かないといけなかったが、それでもこんな譜めくりがついているよりは余程ましである。

いつか、ある有名なピアニストがソロのリサイタルで譜面を見ながら弾いていた際、譜めくりが間違えると「違う、違う、」と会場中に響く大声で怒鳴るので、聴衆はびっくりして顔を見合わせ、「暗記で弾くべきところなのに、あんなに譜めくりの人に怒鳴りつけるなんてひどい奴だ」と言い合ったことがあるが、確かに譜めくりがあまりに下手だと演奏の非常な妨げになるので、彼は腹立ちのあまり、つい、我を忘れてしまったのであろう。演奏会ごとに、上手な譜めくりを見つけるのは難しい。テクノロジーの発達した今日、「電子自動譜めくり器」でも発明してくれる人はいないものだろうか。